



(號四十九百二第)

勇猛精進(續)……大僧正 本多 多生 機微譚語九二福翁訓戒……子 正 山根 青村
 日蓮聖人教義綱要……僧 正 大井 村日 咸 夏と樺太……子 正 能 仁事 一
 新思想と國民の決心 侯 爵 大 井 村 日 咸 和歌「濱風」……子 正 清岡長言選

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
 大正八年八月十五日發行(毎月一冊十五日發行)

布眼藥 效能、たゞれ目、かすみ目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等
 定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾錢、壹圓、

血の藥 定價壹袋、拾錢、貳拾錢
 田産後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣絶、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、千葉縣山武郡源村上布田參百番地 藥王寺

布眼藥 本舖 齋藤日章
 (御注文は總へて下記振替に)
 (振替東京第六七九一番齋藤日章)

念珠ならば小野嘉助店へ
 日蓮宗各本山御用達
 顯本法華宗妙滿寺御用達
 ●御念珠各種
 弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候

京都市寺町通藥師下ル
 念珠 小野嘉助
 電話 中二六〇八番
 振替口座大阪一九七二〇番

●初も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●

佛像佛具 調度所
 位牌木鉦 宮殿幢天蓋其一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
 總本山妙滿寺
 大本山本國寺
 日宗各教團
 京都寺町四條南大雲院前
 舊名「乾清」事
 大佛師 辻井岩次郎
 振替大阪八一五七番
 電話下三二五八番
 多少に限らず御用奉願上候也
 ●御用仰せ被下候は、町呼吸切を旨と致候●

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 直に御聯想下され候儀に候

京都 三條通烏丸東入ル町
草木本店
 電話 中七三五番
 振替口座東一二五五九番

東京淺草區三好町二番地
草木支店
 電話 下谷三四三四番
 振替口座東京二四五六八番

郵税四錢
 定價表ハ御一報
 次第送呈可仕候

小賣部 京都三條小橋東入南側
三法堂佛具陳列場
 長距離電話中貳七八參番
 振替口座東京貳〇七壹
 大阪四貳五九

卸部 京都市三條通小橋西入
 本舖 三法堂 藤田總治



佛像佛具 大販賣所
 位牌木鉦 宮殿幢幡天蓋其一式

●各大御本山御用達
 御來店の節は陳列場へ御來車被下度是迄とは一層勉強仕り莊
 馳品一式陳列仕置候

統一團支部設立廣告

今や思想界混亂して適歸する所に迷ふ。此際混迷を導いて光明の天地を開闡するもの夫れ誰の力ぞや。我統一團設立して茲二十有餘年、斯間主義を宣傳し、時代の思潮を導きしもの聊か所信あり。近來日蓮主義を叫ぶ聲熾盛を致す亦之れ是れが因由ならずんばあらず。然りと雖も吾人をして謂はしめば斯の如きも尙希望の萬一に及ばず寔に前途洋々の觀なくんばあらず。此際我同志奮然一層の努力を要するものあり。於是、我統一團は別に統一團擴張會を設け、本多親下を總裁に、井村師を總務に、而して我誌同人之れが主任となつて全國に對して少くも數百個所の支部を設け、擴張委員を置いて大に團勢を張り、毎年季節を定めて本部より講師の出張講演を爲し、以て國民教化の大舉運動を爲さんとす。讀者數人を有する所即ち支部の設立を爲すに足る。志寄特の士、我統一主任まで一報あらんことを祈る。(松尾生)

發行事務取扱所 東京市小石川區白山前町 統一編輯所
 ◀ 振替口座東京三三五三番 ▶

▲本誌事務取扱所 東京市小石川區白山前町統一編輯所 ▲本誌定價(一冊) 發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯發行人松尾英四郎(印刷人鈴木日雄) (十三錢郵税五風)

(行印會秀三 地番一目丁二町代士美區田神市京東)

○恐れる事はない

●六月に印刷部から値上げをして来たから本誌も止むなく一冊十三銭に値上げをしました。此八月に又々全部三割方の値上げを云つて来ました。何處まで値段を釣り上げる積りでしやうか。

△幾らなりと値上げをするがよい。其應策としては大に働かまじやう。寄附も遠慮なく受けまじやう。恐れることはない。

△煙草の敷島が十五銭になつた世の中、統一の十三銭に無理もないわけだ。

△いつはりの體裁はいらぬ、赤裸々と告白をして統一の經營は面白くやりませう。

●「集金郵便」(振替口座)を差出します以前には必ず葉書にて御一報申しあげることと致して居ますから、成るべく御用意の上御拒絶之れなき様御依頼します。又初めての讀者の中には集金郵便を異様に感ぜられる方もありますが、集金郵便は相方の手数をはぶく最も便利で文法的集金方法ですから、成るべく之を利用したく悪からず御諒解下さい。

●廣告
一金五圓也 神戸 上田徳三殿
右雜誌統一擴張費に寄附相成正に領收候也
小石川白山前町一七 統一編輯所

本多日生猥下著述

日蓮聖訓要義
全部拾貳卷
一四六頁
一六四頁
一八二頁
一八八頁
一九四頁
二〇〇頁
二〇六頁
二一二頁
二一八頁
二二四頁
二三〇頁
二三六頁
二四二頁
二四八頁
二五四頁
二六〇頁
二六六頁
二七二頁
二七八頁
二八四頁
二九〇頁
二九六頁
三〇二頁
三〇八頁
三一四頁
三二〇頁
三二六頁
三三二頁
三三八頁
三四四頁
三五〇頁
三五六頁
三六二頁
三六八頁
三七四頁
三八〇頁
三八六頁
三九二頁
三九八頁
四〇四頁
四一〇頁
四一六頁
四二二頁
四二八頁
四三四頁
四四〇頁
四四六頁
四五二頁
四五八頁
四六四頁
四七〇頁
四七六頁
四八二頁
四八八頁
四九四頁
五〇〇頁
五〇六頁
五一二頁
五一八頁
五二四頁
五三〇頁
五三六頁
五四二頁
五四八頁
五五四頁
五六〇頁
五六六頁
五七二頁
五七八頁
五八四頁
五九〇頁
五九六頁
六〇二頁
六〇八頁
六一四頁
六一〇頁
六二六頁
六三二頁
六三八頁
六四四頁
六五〇頁
六五六頁
六六二頁
六六八頁
六七四頁
六八〇頁
六八六頁
六九二頁
六九八頁
七〇四頁
七一〇頁
七一六頁
七二二頁
七二八頁
七三四頁
七四〇頁
七四六頁
七五二頁
七五八頁
七六四頁
七七〇頁
七七六頁
七八二頁
七八八頁
七九四頁
八〇〇頁
八〇六頁
八一二頁
八一八頁
八二四頁
八三〇頁
八三六頁
八四二頁
八四八頁
八五四頁
八六〇頁
八六六頁
八七二頁
八七八頁
八八四頁
八九〇頁
八九六頁
九〇二頁
九〇八頁
九一四頁
九二〇頁
九二六頁
九三二頁
九三八頁
九四四頁
九五〇頁
九五六頁
九六二頁
九六八頁
九七四頁
九八〇頁
九八六頁
九九二頁
九九八頁
一〇〇四頁
一〇一〇頁
一〇一六頁
一〇二二頁
一〇二八頁
一〇三四頁
一〇四〇頁
一〇四六頁
一〇五二頁
一〇五八頁
一〇六四頁
一〇七〇頁
一〇七六頁
一〇八二頁
一〇八八頁
一〇九四頁
一〇九九頁
一一〇〇頁

第一卷 (既刊)
第二卷 (既刊)
第三卷 (既刊)

聖語錄
總クロノス裝幀
極美紙數九百頁
定價貳圓貳拾錢、送料拾貳錢、滿鮮廿錢

開目鈔詳解
總クロノス裝幀
極美紙數約三百頁
定價貳圓貳拾錢、送料拾貳錢、滿鮮廿錢

本多日生猥下新著
定價壹圓八拾錢、送料拾貳錢、滿鮮廿錢

東洋文明の權威
二四六頁 三百五十二頁
定價壹圓八拾錢、送料拾貳錢、滿鮮廿錢

日蓮聖人正傳
正價壹圓六拾錢
送料壹圓八拾錢
定價貳圓四拾錢

日蓮聖人の感激
正價壹圓六拾錢
送料壹圓八拾錢
定價貳圓四拾錢

日蓮主義綱要
正價壹圓六拾錢
送料壹圓八拾錢
定價貳圓四拾錢

勇猛精進 (續)

一一 勇猛精進と日蓮上人

勇猛精進の例としては日蓮上人が最も適例である、上人に如何なる困苦が迫つても正義は必ず最後の勝利であると云ふことを信じて、少しも弱らない。首の座に坐つて將に首を斬られんとする時にも「是ほどの悦びを笑へかし」と言つて居る、又佐渡の國に流罪せられた時分にも「世が削つてから流された人は多からうけれども、日蓮ほど悦び身に餘る者はよもあるまじ」と言つて居る。「罪無くして配所の月を觀る」と云ふやうな生温いことは言つて居らぬ。佐渡の雪の中に閉ぢ籠められて、寒風凛烈たる中に立つても、少しも之を苦としない、悦びが身に餘つて居る。この精神の悦びに於て寒さを挑ね反して行くこの力と云ふものは、世界削つて流された者は多からうけれども、日蓮ほどのものはよもあるまいと云ふことを實行して居る所に、勇猛精進の模範人格があると思ふ。又之を他の忠君の先輩に探ねたれば、それは澤山あるけれども日蓮上人ほど鮮かに行つて居らぬ、藤田東

湖は維新の忠臣として中々偉い學者であるが、隈田川に幽閉されて居る時に作つた詩がある、それに就て自分で懺悔して居る。酒飲んで居る時、気分が好い時は中々元気が好いけれども、酒が醒めて夜寒くなつて来ると、どうも話らぬやうな淋しいやうな氣になつて、迎も仕方がないものだから詩を作る、併し翌日になつて見ると誠に陰氣なやうなケチな詩が出来て居つて引裂いてしまふことがあると言つて居る。けれど日蓮上人はさう云ふことは無かつたやうである、如何に寒からうとも、寒いと云ふ時に於て益々勇氣を現はして居る、酒呑んだ元氣を藉りて日蓮はそんな勇氣ある詩を作ると云ふやうな事はなかつた。佐渡に於ける彼の請居、塚原の三味堂には一滴の酒も無かつた、食物さへも不自由勝ちであつたけれども、彼の遣した文章は決してさう云ふ弱い所は無い。

そこのまア中々偉い人もあるけれども、日蓮上人はこの勇猛精進と云ふことに就て非常に能く現はれて居る。彼が常々言ふには「月の満つるが如く潮のさすが如し」と言つて居る、世の中に正義と云ふものを貫くには必ず迫害がある、その迫害と闘つて行くには潮がさすやうに

生師書著
國民道德と日蓮主義
日蓮主義
修養と日蓮主義
正價壹圓四拾錢
送料壹圓六拾錢
定價貳圓拾錢

大僧正 本多日生師題字
文學博士 建部遜吾氏序文
北海道長官 笠井信一氏序文
僧正 能仁事一師新著

法華經要解

正價壹圓六拾錢送料拾貳錢滿鮮廿錢
法華經の意味を解り易く知りたいたい、是れ皆我日蓮門下の懇求するところでありませう。能仁事一師は通俗講話の大家として、其名を知られて居る人でありませう。今回法華經八卷に就て分り易く講義をなされまして新に美装して出版しました。文字は總振り假名つきです、早く法華經の全體が知りたいと思はるゝ方はスグ御注文下さい。

右各書冊取次
東京小石川區白山前町一七
統一編輯所
振替口座東京三三三三三番

一二 人生と奮闘生活

この人生社會と云ふものは、唯だ切りに平安を求めたナドと云ふことも間違つた事であるし又悪い者と妥協すると云ふことも話らぬ事である、それは低い場合に於てはいろいろ其處に遣り繰りもあつたり、方便手段と云ふものは是れだけけれども、自分の信念とは、飽くまで正義を貫いて行かねばならぬ、其處には必ずや人生は寸善尺慶と云ふやうなことで、正義には反對のあるべきものなんである、飽くまで平安と云ふことを前提としたならば、世は進歩しないものであつて、正義には必ず迫害がある。所がそれと妥協して、豆腐で酒呑んで行かうと云ふ、宗教の中にもさう云ふ妥協主義の奴がある、

どうせ人間は悪い者であるから、信心さへしたら道徳観念に於ては責任を解除してやらうと云ふので、唯だ、徒に信仰を説いて、道徳の責任を解除する宗教がある、併しそれは個人を害し、社会を害し、國家を毒害するものである、飽までも人には道徳の責任解除は許されぬものである。それは悪い者と闘つて行くこと云ふことが寧ろ人間の楽しみでなければならぬ、何故かと云へば、軍人になつた以上には、敵が永遠に無いものぢやと云ふことになつたならば、軍人はまるで閑事業であるから失望である。即ち、事しあらば火にも水にも入らばやと

であつて「事しあれば」と云ふことが前提である、敢て祈る譯ではないけれども、我が帝國に仇なす者があるならばと云ふ事があつて、初めて軍人の力が現はれるのである。乃公が生きて居る間は一切戦争は御免ぢや」と云ふことが前提であれば、軍人の勇む所は無い譯である。人間は必ずや其處に反對と云ふものを豫想して掛らなければならぬ。是も日蓮上人が能く言ふて居るので、徳を積むには、困難に遭遇して初めて積めるのである、何にも困難が無い、人が皆が好く待遇して呉れたならば、徳は積めるものでない。正義の前には必ず迫害があり、困難がある、それに堪へるに於て徳が積まれて行くのである。軍人は強い敵に出會つて初めて功勳が現はされるやうなものである、奮闘の生活は、

一三 生活問題と正義

そこで生活の問題に於てもやはりさうである、正義々々と云ふと生活から離れたやうに思ふけれども、さうではない、やはり生活に就ても其處に正義がある、商賣するに就ても、労働賃金を取るに就ても正義がある例へば労働者が言ふたならば、唯だ賃金の増加ばかりを求めると云ふが如きは不都合である、能率の増加を圖つて而して後に賃金を求むべきである。又唯だ賃金を得ることのみを走りて、労働者自己の人格を養成することを忘れるが如きは、大いに不都合である。即ちそれは不正である。故に労働者が相當なる尊敬を社會に要求するに方つては自らの理解を進め自らの人格を高めると云ふことを前提として、之を求めなければならぬ。賃金の増加を要求するに方つては、ノラリクラーとする所の慣情の精神、及び何の技藝にも熟達しない日本の労働者の如きは、能率の不十分と云ふことを反省しなければならぬ、而して後に賃金を要求すべきである。それから又資本家が無闇に利益を恣にするにはいけないけれどもそれは労働者の言ふべき事でない、之を制裁するものは天下國家に法と道がある、法に由り道を以て制裁しなければならぬ。資本家を制

観念は、飽までも正義の思想と倫理の調節を前提としてさうして、生活の問題に這入つても決して感はぬやうにやつて行かなければならぬと思ふ。さうさへすれば不思議なものであつて、正直な労働者は餘り我慾も言はないで能く働くやうになる、さうすれば資本家も、それを喜び敬ふてより多く引立て、立派に身の立つものである、諸君が人をお使ひになつても分る譯であつて、そんなに文句を言はぬけれども能く働く一俸に乗つて居つても黙つて能く走ると云ふと、此の車夫は中々感心だ、水の一杯も飲ま「さう」と云ふことになる。然るにボン／＼歩いて居つて、「そんなに急げるのですか、酒代でも呉れなければ」と云ふやうな事を言ふと、こつちも癪に觸る、幾ら遅くとも構はない、別に用は無い急がないんだから」と腹を極めてしまふ、モウ一度言へば「降りてしまつて電車に乗つて行け」と云ふことになる。人生と云ふものはさう云ふ衝突で以て解釋すべきものではない、互に思ひ思はれて行くと云ふ道徳でなければ治らない。

一四 實利主義の失敗

私は経済論になつて来ると少し商賣が違ふけれども、経済の問題と雖も、道徳の關係を離れた経済論と云ふものは駄目だと思ふ。營利會社營利社會と云ふが、是が抑々間違つて居る、會社と云ふものは、決して單に利益のみを以て人

間の社會に存在すべきものでない、營利會社とは云ふけれども、それはやはり利益をも得るが、其處で製作する物が世の公益を輔佐して居るものである、例へば此處にある花瓶なら花瓶を造ると云ふと、之に依つて人間の精神に美感を興へて、人間の幸福を増進して居るものである、之を國外に賣出せばやはり國家の經濟を利益して居る。國家の利益の爲め、社會の公益の爲め、人間の幸福の爲め、而して之に依つて製造者が利益を得て居るので單なる營利と云ふものはあるべきものでない。營利が表になつて居ると云ふだけのものであつて、唯だ量の多少を論ずるだけのものである。全然營利のみで、社會の公益も忘れ、國家も忘れ、何も彼も忘れて單に利益を圖るやうな業務と云ふものは、人類社會に存在すべきものでない。で經濟學と云ふやうな事も自分はやらぬが、若し年若くしてやつたならば、大いに新發見を爲すべき餘地があるらうと想像して居るのである、餘りに利益を本位にして、社會の問題を利益から解釋することのみ盛んになつたのは、現代の凡てを諷つた原因ではないかと思ふ、現代は凡てが物質本位であり、利益本位であるから、その著者所はみな困つてしまつて居る、國家と國家とが實利主義の爲に闘つて居るのが今の西洋の戦争であるこの西洋の戦争の結末でも、各交戰國は大いに困るに相違ない、一時はどうか斯うか治まつても、又直ぐ平和は破裂するであらう、是はその

裁する者は労働者である、労働者を壓迫する者は資本家であると云ふやうに、相互利害關係のある者に喧嘩をさせて、社會を組立てると云ふことは頗る拙劣なる方法である、如何なるものにも毅然として動かすべからざる國法と道がある丁度原告被告は利害を異にして居つても、原告の爲に私するにもあらず、被告の爲に私するにもあらざる公正なる法律があつて、天下の事は裁断せられる。經濟亦然り、道徳亦然りである。是等利害關係者にその判断を要せしめる様などは間違つて居る。労働者にも反省すべき點はあるだらう、資本家にも反省すべき事はあるだらう。私は彼の西洋流の思想に於て、労働者の味方をするとか云ふやうな事は、我國に於ては甚だ面白くない事だと思ふ。労働者を愛するとか多數を愛するとか云ふやうなことは、論の無い事である、哀れな者を可愛がること云ふやうな事は言ふ迄もない、それは泥棒でも可愛がる。泥棒が貧乏人の家に這入つて寶物を開けて見るとか何にも無い、是は可愛相だと云ふので、五十錢銀貨の一つ位置して行く、泥棒でも貧乏人には同情する。貧乏人の味方だと云ふやうなことは、馬鹿げた話である、天下の貧乏人に同情することは、味方するも味方しないもない、其處に道がある正義がある、全體の者の幸福を公平に判断することは、政治でも道徳でも宗教でも其處に立場があるのである。

歸結が高き道徳の觀念に於て復活するならば、この戦争の結末は自出度く平和に行くけれども、又その平和が能く維持せられるけれども、今のやうに實利主義を以て押し進んだならば、如何に慘憺たる戦をやつて終りても、又直ぐやりに相違ない、階級戦争と云ふやうな事でも、單に利益論のみから判断したならば、満足の結果は望まれないであらう、無利益を無視することは出来ぬけれども、それは利益も或る程度までの解釋であつて、それ以上は資本家も社會の公益の爲め、國家の隆運の爲に、成べく安く良い品物を造らうと云ふことを前提とし、労働者も成べく良い品物を造つて安く世の中に供給しやうと云ふことを前提にしなければ、世界的經濟を利用することもなく、又社會を益する事もないのである労働者は資本家ばかりが悪いと云ふけれども、資本家が利益を得ると同時に労働者も利益を得るのである、この二つが一緒になつて利益の奪ひ合をやるから、拾錢で出来たコップが五拾錢になつてしまふのだ、この場合に於ては資本家も労働者も共に人生の敵である。どうしても資本家も労働者も、社會の公益を國家の公益を前提として、或る程度の利益を以て満足すると云ふことにならなければ、世の中の幸福は来るべきものでない、故にすべての經濟を制裁する所は道徳である。道徳を離れたる經濟論などは全部價值なきものであると私は斷定する次第であります。

日蓮聖人教義綱要 (第廿四回)

井村日成

第八章 修行

第一節 修行の要目(つゞき)

我日蓮主義に於ける信仰は、無智有智を擇ばず、利根鈍根に係らず發心の始より得脱の終に至るまで、徹底して信心の行を以て修行の要旨とするのである、信仰を離れては、手なくして寶山に入り、足無くして千里の旅を企つるが如きであつて、到底其目的を成就することは出来ぬ。

然らば如何なる修行を法華經の修行とするか、日蓮主義の信仰の状態とは如何なる事なる事なるのであるかと云ふことになるが、これから法華經に依り、聖人の御遺文に依つて其状態をお察致さう、先づ聖人が其修行法を定むるに何を依據としてお定めになつたかと申すと、四信五品抄の中に

くのに、あまり功德の量が多くて設き難はす事が出来ない、そこで五十展轉隨喜の功德と云ふて、初めて説教を聞いて信心を起した人が、他の人に傳へる、其人が又他人に傳へる、斯くして五十人目の人に至る、大分稀薄になつて居る、ダン／＼分量も減りて内容も薄くなる譯であるが、其第五十人目の人の功德がやつと佛様に説けると仰せられて、隨喜功德品として別に一品お説になつて居る、其第五十人目の人の功德は、四百萬億阿僧祇の世界の凡ての生物が抱いて居る物質上の欲望に對して、八十年の間總ての物質を供給する其上に物質計で無く精神上にも立派な證悟を興へる、其人の功德は非常に莫大なものであるが、其人の功德と第五十人目の人の功德とを比較して見ると、此莫大の功德を以て功德の百萬億分の一にも及ばないと云ふことを説かれた、況んや最初説法を聞いた第一人目の人の功德は到底計り知るべからざるものであると説かれた、斯様に法華經信仰の功德は非常に莫大である處から、法華經を後世解釋する人が此は餘程深く法華經を信じた人の事であると云ふ様に解釋したが、日蓮聖人は是は飛んだ間違だ、決してソナナ立派な人の事では無い、我々の様な無學文盲のもの、一念難有いと信じた處が一念信解初隨喜の位である、功德が多いと云ふことは、經の力用が大いから功德が多いのである、故に行淺功深以顯經力と言ふたので

日蓮聖人教義綱要

には所謂本門の中の分別功德品の半品より經を終るまで十一品半なり、此十一品半と五品と合せて十六品半、此中に末法に入つて法華經を修行する相貌分明也、是に尙事行かされば、普賢經涅槃經等を引來りて之を糾明せん、此御文は總體の依據をお示に相成つた者で、其中に特別功德品の四信五品を以て修行の模範を定められて、前文に引續いて、

其中の分別功德品の四信と五品とは法華を修行するの最大在世滅後の總鏡なり(同頁)

と仰せられた、廣くすれば法華經の流通分の全體と普賢經と涅槃經と共に法華經を修行するの法を説かれたものであるが、其中に殊に四信五品、又其中にも一念信解と初隨喜とが一番大切なのであるをとお示に相成つて居るのである、一念信解と云ふも初隨喜と云ふも、共に信仰の一念を以て佛法修行の最大要義とせられたのであるが、信仰と云ふものは何云ふものであるかと言ふことを定めるに就いては、廣く法華經涅槃經等に示された處を考へて其意味合を見出して來ねばならぬ、そうでないと信仰と云ふ

ある、それを行する人の力に以て行つて考へるのとは間違ふて居ると論ぜられたのが四信五品抄である、要するに法華經の修行は、如來の壽命長遠なるを信するにある、そこでその信するところか、それが明瞭にならねば但口先で信する々々とは返遠近しても何にもならぬ、これから、其信する状態を經文に依つてお察するが、先づ御經文にお示に成つて居る、法華經を信すると云ふ事柄を一々擧げて最後に纏めてお察を仕様と思ふ。

無量義經十功德品 此經は本諸佛の室宅の中より來り、去つて一切衆生の發菩提心に至り、諸の善業所行の處に住す(編法二八頁)

我々の信仰の源泉は、諸佛如來の慈悲心の中より發し來るものであつて、其慈悲心と吾人の發菩提心の向上的精神とが結合したる處に信仰と爲て顯はるゝものであると云ふことを示された、菩薩所行の處とは吾人の信仰の發現した處である、此文は其信仰の源泉を示された文で信仰を語るには其源泉を忘れてはならぬことをお示に成つたので、最も大切な事柄である、今日、は信仰を語るに其源泉を忘れて居る人もある様であるが、それは信仰の意味合は分らない。

普賢菩薩勸發品 若善男子善女人、四法を成就せば如來の滅後に於て當に是法華經を得べし、一には諸佛に護念せらるゝことを得、二には諸の徳本を植へ、之には正定聚に入り、

五

この意味合が充分明瞭にならないと思ふ、今本抄に示された、一念信解と初隨喜とに就いて一應お察をしてから、各品に示された處と涅槃經に示された文とを引いて法華經の行法の如何なるものなるかを明にしたいと思ふ、一念信解と初隨喜の事は、分別功德品に其れ衆生あつて佛の壽命長遠是の如くなるを聞いて乃至能く一念の信解を生ぜば所得の功德限量あること無けん(編法三四七頁)

と説かれた、此は一念信解の文である、引續いて功德の深大なることを示して、八十萬億劫に五波羅蜜を行する功德と比較されて其千萬億倍にも超へて居るとお説になつて居る、此文に一念信解とあるが、實は一念信である、何故かと云へば經に次の位を説くに、佛の壽命長遠なるを聞いて其言趣を解する有ん」と云ふてある、第二位に於て言趣を解するものなるが故に第一位には解の意味は無いと言はねばならぬ故に第一位は一念信である、日蓮聖人は、解の一字は後に奪はると、會通せられて居る、我等一念如來の壽命長遠を信する時は八十萬億劫に五波羅蜜を行するよりもより大なる功德を成就し得るのである、更に初隨喜の状態を説いて

又復如來の滅後に若是經を聞いて毀譽せずして隨喜の心を起さん(編法三五頁)

とある、毀譽せずして隨喜の心を起すとは、ホンの少し難有いと云ふ心が出た位である極々の初心のものである、處が此初心の功德を説

四

餘の四行を爲すのであるから、受持の一行が最も大切である、信念なくしては讀解書寫は何等の功德とはならないのである、現今は五種の中讀解行が専ら宗教信仰の形と認められて居るが、信念なき讀解は著書器と同様なものである、十種供養は現今も、佛前に華を供へ香を焼く杯の事が行はれて居るが此も信念の上に成るゝ形式なので、根本は信念の一である、信念が無い十種の供養は魂の無い人形の衣裳と同様である。

同品 如來の滅後に四衆の爲に法華經を説くと欲せば、云何んしてか説くべき、是善男子善女人は如來の室に入り、如來の衣を着、如來の座に坐して爾して今し四衆の爲に廣く此經を説くべし(法華二五四頁)

此は弘經の方軌を示されたのである、次下の經に此三軌を釋して
如來の室とは一切衆生の中の大慈悲心是也、如來の衣とは柔和忍辱の心是なり、如來の座とは一切法空是なり
と、末世に此經を行するものは此三軌に則つて此經を弘めねばならぬ、前の五種法師は自行化他に互つて居るが、今は専ら化他の方面に就て其方軌を示されたのである、如來の室とは勸發品の文の一切衆生を救ふの心を發せるものと云ふと同じ意味であつて、如來の大慈悲に感憤するより起る慈悲心である、聖人が「涅槃經」に云く一切衆生の異の苦を受くるは悉く是如來一人の

苦なり等云云、日蓮云く一切衆生異の苦を受けたるは悉く是日蓮一人の苦と申すべし(遺二〇三八)と云ひ、又「鳥と蟲とはなけどもなみだち、此なみだ世間の事には非ず、但偏に法華經の故なり」(遺九六二)と仰せられたるは如來の室に入り給ふが故である、此法華經は如來の現在すら怨嫉多し況や滅度の後をや、末世の弘經は一入の難事なるが故に當に忍辱の衣を着すべきを示し、専ら此經の宣傳に信事するものは平等の心地に住して因はるゝ處あつてはならぬから一切法空に住せよと教へられたのである、勸持品には此三軌に就て、具體的事實を擧げて弘經の難きを示されて居る、日蓮聖人身讀の二十行の偈文が則ちそれである、此に對して、安樂行品には四安樂行を説く。
勸持品の三十行の偈は深行の菩薩の堪ふべき處、初心始行のもの、堪ふ處にあらず、文殊師利菩薩此等初心のもの、爲めに、其方軌として四安樂行を説き、始行の菩薩の受持宣傳を得せしめられた、此品に示した處は天台一家が専ら其依據として居るので、古來僧法攝受の行儀を説きしものとして之を輕視して居るの例があるが、必ずしも過時去曆とのみ疑ふことは出来ぬ、現代に必要な事柄も深山ある様に思ふ、大に研究すべきであらう、本文は冗長の故に省略することにする。

省略することにする。
實塔品 諸の佛子等誰か能く法を護らんもの

新思想と國民の決心 (談)

侯爵大隈重信

今日の社會主義、言換ふれば歐米の社會主義、之は無政府主義も同様である、財産も名譽も土地も權力も悉く社會黨に掌握するといふ、意氣込み、之が所謂サンズカリズムである、英米でも之には附口頭首の状態である其れが國を異にし歴史人情風俗を異にする日本に輸入しようとした所で功を奏する者でない。

元來社會主義といふのは東洋が元祖で支那も日本も昔から社會主義を以て統治の根本としてある、孟子の所謂「心を勞するものに養はれ力を勞するものを養ふ」といふは即ち其である、心を勞するものとは腦の勞働者で力を勞する者とは體力の勞働者である、心を勞するものとは即ち知識階級をいつたもので今日といふ官吏、力を勞するものは昔は一に農民をいつたものだが今日はいち労働者に當る譯である、斯ういふ關係で上の者が下に養はれ下の方に依りて上に立ち、我あるは農民あるが爲であるといふとから日本では農民を指して「おほみだから」といつて農民を愛撫し擁護し來つたのである、其處で今日でも上に立つ者は凡て此心を持つて國民の爲に勞働者の爲にといふことを忘れさへ

新思想と國民の決心

なる、當に大願を發して久しく住せしむることを得せしむべし(法華二七〇頁)
正法の久住を以つて法華修行の要路として御勸獎になつて居る文である。
提婆品 即ち仙人に「諸て所須を供給し、薪及果菓を採り、時に隨つて恭敬して與へき」(法華二七六頁)
給侍奉公を以つて法華修行の大事とせられて居る。(ついで)



●我觀縱橫論を讀む

佛教の傳道に一新生面を開かんとして佛教救世軍を組織し雜誌第三佛教を發行したりし柿花啓正君、近來大阪にありて實業海に游泳しつゝあり、而も其餘閑意を信念より去らず曩に一書を著し今又「我觀縱橫論」を著す。編するもの多く宗教的見地に立ちて各方面の事物を評論す、題目に冠するに青年の聲の四字を以てす。生氣血管を漲るもの定に此の思ひあり、代七十錢、東京市神田區錦町一丁目二松堂發行

けることの出来ぬのは即ちその證據である此の仁俠義俠を今日の詞でいへばウィルソンの正義人道である、弱きを援け強きを挫くは日本人の特性である、其から文明國の長を取り短を補ふも日本人の特長である、自ら和製のビスマークたらすにビスマークの長を取る、此が即ち同化といふのである、併し日本も此から非常に進歩發展しよう、今迄は東洋の一孤島國で世界も相手にせず好加減にあしらはれて居つたそれが今度頭を擡げたので寄つて集つて日本を壓迫しようとするのであるあらゆる、恥辱、あらゆる侮辱を加へたといつても宜しい、此では如何にお人好しの日本も厭で居らるゝものでない、日本は前目の日本も厭で居らるゝものである、其れに付けても日本國民は此處五六年間は全國一般に兵營生活するの覺悟がなければならぬ、我輩の佐賀では一時放擧、相撲、講談等あらゆる贅物を禁じ一善擧つて兵營同様の生活をしたことがある、今日の日本國民も朝野擧つて此の決心と覺悟を以て列國と大々的競争の舞臺に立たなければならぬ。

●力産會起る

規則一覽賛成の人は 統一編輯所へ

機微譚語 山根青村

九二 福翁の訓戒

福澤諭吉翁の實験談なりとて或書に左の物語あり、世の中に無學な者ほど憐むべきはなし、されど夫が一轉すると生物知りよりは却てよいもの、余が邸に入入りする肥取人は至て正直なれど非常に強慾の性質にて、唯に金錢を蓄める一方にて稼ぎ居る人味なり、一日余に向つて曰く、「先祖の年忌供養などは甚だ冗費のかるもの之を行はぬとて何も先祖が怒ると云ふにもあらざれば、二十年に一回か三十年に一回すれば、大いに冗費も省けるべし、又先祖の石塔も澤山ある上に追々増えて困る、是も一基に法名を刻み其餘は賣却すれば幾分の金になり、且つは年中捧げる香華の料も省けて餘程經濟なれば、實行したいと思ひます」余曰くそれは確かに利益なり、併し猶ほ夫よりも

儲かる事あり、遣つて見ては何うだ、儲かる事なら何でも致しますから教へて下さい、汝の家父は餘程老若して居るから遠からず死んであらう、死ねば葬式を出す葬式をすれば村中の人が来て酒を飲み飯を食ふ、其費用は莫大ならん、之も致さぬからとて死人が怒る譯もないから、全然止めて死んだら汝の邸の中にある溜池に投げ込んで置く、日數の経るに従つて腐敗する、夫を時々丸太棒もてツ、ク遂には皮肉が溶けてドロ／＼となる、夫を糞桶に汲み取て田畑にやれば良い肥料になる、葬式の費用省けし上に肥料を得る、甘い儲けにあらざや、汝は日頃父のことを老老の殺ツブシ早くクタバレばよいと云ひ居らずや、その理合せに此金儲けを遣るべしと教へしに、只頭を低れて一言をも吐かず、先刻金儲けになる事なら何でも致すと云ひしにあらざや何故返らぬ。

事をせぬと責めしに、漸く首を揚げ「如何に金儲けなればとてそんな事は出来ませぬ」と答ふ、何故出来ぬ人間の死せるも魚類獸類の死せるも同事ならずや、魚類獸類の死骸をツ、キクズシテ肥料にすると同様、人間の死體も出来る譯ならずやと詰れば、同じ事ではあれど人間として、親の遺骸を犬猫同様にツ、キクズシテ肥料とする事は出来ませぬ」と云ふ、於是乎余は大喝一聲、黙れ汝は人間ては無い犬猫であらう、犬猫は先祖の供養も無い葬式もせず石塔も建てず、葬式年忌は人間のする事、今汝は人間のなすべき事をせぬと云ふ、されば最早畜生道に墜ち居るものと思ひし故、先刻より畜生道の事を云ひ開せたるなり、然るに人間として出来ぬと云ふからはまだ幾分人間の精神存在せるなり、それが汝の本心なり汝今本心を認めしからは從來の様な畜生の心を振り捨て、眞正な人間の道を履み行ふやう心掛けよと誠め遣りしに、鬼の様な顔より涙をハラ／＼と流し、先非を悔ひ行を改めると誓つて云ひしが、爾後言行一變して村民の信用を回復した

り是だから時々訓誡を與へてやらねばならぬ。流石は世故になれし福翁、巧みに敵の劍を奪つて其肺腑を刺り理窟詰にして他の反省自覺を喚起し、潜在の本性を引出し来る、職に法教師の榮位に有るもの、其呼吸呑込み置かざるべからず、特に慈悲と報恩との關係を徹底せしむべく日蓮主義者の立場よりして一段切要を感ずる問題ならずや、夜色沈々窓下に燈をさりとて左の遺文を拜讀すれば、感轉々甚大なり。

聖語、親は十人の子を養へども一人の母をやしなふことなし、あたゝかなる夫をば懐いて臥せども、こゝへたる母の足をあたゝむる女房はなし。
(刑部左衛門尉女房御返事)



和歌「濱風」

子爵 清岡長言選

○天 本所區吉田町 勝田宣和

○地 丹後國 廣岡 圓

○人 千葉縣 笠見樂也

○入選 打よする波は鼓にかよふなり舞子の濱の松風のこゑ

○うちわたす沖より風の通ひきて夏ははまへそすみよかりける 京都 中野 正甫

○流火のかすを敷へて磯つたひたもともかくはま風そ吹く 雜司ヶ谷 矢野 浪子

○潮浴ひてかへる家路の濱つたひ松ふく風そ涼しかりける 大阪 長尾翁之助

○堪へかたきあつさも沖のしら波にかせもすましき吹き上の濱 千葉縣 磯岡 榮司

○沙あひてよのうきこともわすれり濱の松風たもとすましき 札幌 法谷きよ子

○流れよる瀧くつ踏みつゝ濱風に吹かれてあゆむ夕へ涼しき 三河島 西澤 明花

○おきつ風なみのまに／＼おとつれて暑さをよそに吹あけの濱 千葉縣 小川 藏司

○沙をあひこともわすれて都人濱風通ふやとにねふりつ 小見川 星野 聖祐

○打よする浜に夕日の影さしてこゝろをすます濱の松風 大阪 竹内 執榮

○しほあみし都の人は立かへりはまへ淋しく秋風のふく 千葉縣 江波戸あき子

○濱風にたもとまかせて今日もまた友と遊へは倦かぬなりけり 静岡縣 佐原 弘風

○ま砂こ地やよせてはかへす白波にこゑうちそふる濱の松風 千葉縣 林 系し子

○神代より今もかはらぬ浦波によせてはかへす松風のこゑ 同 柳橋八重子

○背のふねの踊るを待ちて妻と子の立てる濱邊に夕かせの吹く 綾部 大機助次郎

○波のおとも高きこゑではま松の梢をばらふ風のおとつれ 千葉縣 春日よし子

○世の塵を拂ひてしかなそよ／＼とこゝろもきよき濱の松風 京都 有田 照陽

監督布 夏と樺太 能仁事一

○涼しい！秋のやうだ

樺太に對する色々の話で描いてゐた空想は樺太の土地を踏むに到つて全く破はされて了つた。樺太も依然土は黒い、山は青い町には商家が軒を並べてゐる、煙突からは黒煙を吐いてゐる。日本人は少なからうと思つたのに町の内にはアイヌも居らねばロスキーも居らず、熊も居なけりや海豹も見當らない。思つたよりも住よい處であつた。特に夏の樺太と來ては誇張の言葉を如何に上手に飾つて云つても内地人に其實を傳へる事は出來ぬであらう。全く夏朝の樺太は天下一品である。暑い内地、特に中國の夕陽の蒸し暑さ、着更へた浴衣の襟に油汗が滲む経験のある自分が朝晩の涼しい、晝も暑からぬ樺太に來ての感想は特に深いものがある、三伏の炎天もいつしか去つて涼風そよぐ十月の朝、田に黄金の波が打ち、稔の襟もつくろふ初秋のころの氣持いい朝晩が、今七月の樺太の朝夕であるとしたら誰れか樺太の夏を思はぬ者があらう。七月一日には大泊の樺太中學校が、七月十日には豊原町の小學校が運動會を開いてゐる事實は内地の四月か十月の運動會季節に今が如何によく相當してゐるかを雄辯に證明してゐる。

○冬の樺太

夏の樺太を語るなら、勢ひ樺太の冬を述べなければならぬ。だが冬來た事がない自分は信すべき人から聞いた事實を卒直に述べる外はない。夏の涼しいだけ冬の寒さは當然であるとは思ふが、十一月から翌年の四月まで土地は雪で埋もれて黒い地の色は見たくも見えず、湿度の甚だしい時は攝氏で氷點下三十五六度から四十四度の寒さだ、天地凍て凍らないものはない、水や酒が凍るのは勿論のこと燈したランプの油が凍つて段々と火が暗くなる事もある。土

地は地下三尺まで凍つて了ふ、滑稽なのは鼻下鼻が下唇に凍りつき、物云ふにも口があかぬ事があり、帽子も頭巾も凍りついて人に遇つたからといつて脱いで御仕儀など出来るものでない。どんな顯官の宅を訪ふにも内へ遣入つてスートゾの側で先づ手を濯め、頭巾をあたいめ、然る後帽子を取つて挨拶するせつかち内地都會人士の一寸真似るに六ヶ敷い事だと思ふ。

○雪中の小學生

雪が降り積つては普通の家は殆ど冬眠と同じ状態に在るのだが、學校ばかりは左様は行かない、暑中休暇を冬期休暇に當てゝはあるものゝ六ヶ月も休まず課にゆかぬから、自然雪中の登校が必要である。處が吹雪の爲に一寸先も見えない様な事があり凍死する學童があるので近來は登校困難の場合には警報を發すると各工場は一様に非常氣笛を吹き鳴らす、すると其日は臨時休業となる、でも登校中後から急に荒れる如き場合には警察からは巡查を學校へ送り先生が一本の綱を持つて先頭に立ち巡查が最後を掴んで西組なら西組の十五人なり二十人なりの學童はそれを握つて家庭へ送り届けて貰ふ制度が出來てから安全になつたといふ事である。

○冬の日暮れ

夏は午前二時過から太陽が出始めて夜は八時半頃まで明るい代りに、冬は八時頃に夜があけ

- 帆に孕む風やあまりて磯馴れし松に音する御幸濱かな 同 有田 信子
- おもしろき松の木かげにひとり立ちて夏を忘るゝはまの夕風 綾部 大槻 致道
- 都人名残り惜しくもかへらん吹く濱風を後にのこして 千葉縣 並木 うめ
- 快よくなりぬる父も濱つたひきよけ月に夕風の吹く 同 並木 博
- 夕波は赤き入りひにかゝやきて濱への松に風わたるなり 藤布 大塚 曉花
- 少女子か袖を舞子の濱風にうちよする濱の美しきかな 藤岡 熊澤 優子
- 濱はいま暮れて静かに海面をわたれる風の心地よきかな 牛込 永橋 榮治
- いままなをむかしなからの住吉の濱の松風こゑきこゆなり 澁谷 立川 金峰
- 打よする波は碎けて玉とちる宵の濱に渡る夕風 東金 萬新會一止
- 眞白なる帆舟の數もさやかにて風も涼しき濱の松原 千葉縣 岡本 琴子
- あつき日もいつしかくれてそよとく快涼しき濱の松風 同 岡本榮次郎
- ましろの濱のまごに涼しくもしらべ妙なる松風の音 栗嶋 岡田 鐵哉
- 吹くからに濱の花散る濱風に涼しくかへる海士の釣舟 千葉縣 堀江巴詩女
- 沖つとりはまふくかせにわくわく背のふねをまつあまがつまかな 芝 大塚 眞佐
- ふく風のすましき濱にをとり子の掘出す貝の面

て三時には暮つて了ふ、官衙でも學校でも二時半になつたら窓際でなくては仕事は出來ぬ位暗くなるといふ、だから樺太では冬期は午前十時出動して午後二時には退勤する出動時間四時間だといふ。それでも大雪の日など登壇出來ぬ事もあるが近來スキーを採用してからは殆ど缺席者は無くなつたといふ。申すまで？ないスキーとは幅三寸に長さ七尺程の細長い板、之を左右の足へ一本づゝ窓いて杖を手に持つて雪の上を走る事である少し練習すれば面白い程軽快に駆走する事が出来る、山登りも出來れば、七り降りる事も出來る、便利なものである。男でも女でも大人でも小供でも使用するが小供が一番上手で、毎年スキー競技大會で一等を勝ち得るのは少年だといふ。

○山火恐るべし

樺太の名物は山火事である。諸は草の太さは周圍五寸葉の大きいのは疊半疊位なのがあり、食用としても美味であるから或は煮て食ひ、或は之を漬けて食べる。名物山火事に到つては驚く外はない。自分の旅行したのは大泊町から豊原町まで二十里足らずの汽車旅であつたが沿道には家も無ければ畑もない唯々打撃く林のみ、目の届く範囲悉く樹木であるが又驚くことは、山火事の跡のない處がない遠く右に、近く左に木葉悉く脱して、帆柱が數百本幅狭した様に、黒い棒が天に向つて密生してゐるの

次號「閑庭草花」

▲注意 繪切は月末着の事、濱風の方、一日遅者閣下に送り後着の方は本誌に掲載するを得ず。以後も左様御承知を乞ふ。(一記者)

一	純
二	律
三	句
四	欄

「蟻 郷」
搦く葉に鏡振り上る蟻郷 京都 有田 麗陽
蟻郷や葉を隣りにて秋の蟬 牛込 永橋 曉江

を見ない處はない、それらの總ては山火の遺物である。一度火を發すると大雨の無い限り消し止むる方法がないからである。特にツンドラの様に地下敷尺の處に木葉の層を作してゐて、其れに火がつくと火は地下を這つてどん／＼延びる、そして枯木の根に來るとポツと熱を上げ、又下を這ふ。パルプ工場の櫻井主事の談によると會て露領時代には西海岸で前年に發した山火事、雪の冬を燒け通して越年して東海岸まで貫通した有名な話さへ殘つてゐる、地下の火だから雪があつても閉口垂ぬとは扱つても樺太だけに大仕事である、だから「斧鉞恐るゝに足らず、山火恐るべし」といふ格言さへ行はれてゐる位だ。あの無盡蔵の大富源樺太の森林も、山火事の爲には何れ程の災厄を覆つてゐるかわからない。炎天が十日も続けばすぐ山火を發するといふ。實に樺太は山燒くる國であるわい。

樺太の手獲り

樺太の南端に亞底灣がある、地圖で見れば大した灣とも思へないが灣口から灣底の大泊港までは四十五海里もあつて汽船は灣に入つて港に着くまでに五六時間かかる。此灣の西の突角が能登呂岬でこゝに燈臺がある。此燈臺守は年々何百羽といふ鷺を手獲にするので収入が數百圓もあるといふ。談、聊か探検小説にでも有り相な話だが事實だから序に述べるなら、此邊は一般に霧の多い處で、濃霧の夕暮れや月明の夜な

ど燈臺の燈を自覺けて鷺が風んで來て、厚硝子に打衝つて其の儘昏迷して地上に落ちたのを毎朝燈臺守が拾ふのである。こんな意外の収入があるのだから燈臺守は燈臺商人の株が千圓でも譲らないといふ。燈臺守が利益あると同じく御用商人の利益も殆ど折半するだけであるからである。

盜賊の居ない國

此世智辛い世の中に盜まれる心配のない町といふのも亦少いであらう。買物に行くにも、大泊へ行つて一日二日家を留守にしておくにも、樺太の人はすべて家を閉け放ちにしまし、出かける。一寸うっかりして居れば下駄がなくなり、靴が盜まれる内地での経験ある自分には不安でならなかつた。が併し盜賊は全くゐないらしい。取つたにしても之を處分する處がない。大泊港へは一本しか道がない。其他は山又山、森又森、船の乗場も定まつてゐる、住所姓名を訊ねられる、逃げるべき道がない少々のお金なら盜むより働いた方がいい、一日働けば二圓でも二圓五十錢でも得られるのだ、各自の生活が安定なのと社會の制度の然らしむる爲に盜賊は少い、先年或る盜賊が豊原にあつたが大泊へ逃げ途中で押へられたといふ一話が残つてゐる位である、何にしても一萬からの人口の都會に盜賊のないのは珍らしい。

日蓮主義宣傳

江見乾文師

救世濟民の大業に誓願を抱く人 數日前營口に一人の日蓮宗徒が見えた、年少にして法華經の門に入り、熱烈なる日蓮主義の法禮を受け、後東洋大學を出て益々日蓮主義廣宣の誓願を固うし、視る處在つて大連に來り轉じて營口の人とならんとするのである、大連では金子雪齋翁の振興社に塾生として幾月かを過ごした、雪齋翁が寄せた紹介の書に曰く前途の

苜蓿を排し 一意理想に直往し救世の業に従はんと欲する熱誠の人物に之有候云々、當地へは願本法華宗の管長本多日蓮氏の紹介で小寺洋行の重松玉次氏を主として便り來つたので在つたが、同宗の信者として佐藤臣少、市田三郎、川島重治、間生卯之助の諸氏があることを知り大に喜んで居るし、諸氏も亦大に教風振興の機縁を得たとて歡んで居る。

資本對労働 問題の如きに對しては最も適切な解決を與へねばならぬ、今日此問題を扱ふ人は物質から許り觀やうとするらしいが、然れば果して利益を幾割宛に分かたば可なりと云ひ得るか、蓋し至難の問題で在つて上下交々利を征するに於ては圓滿なる結局を求むるも得て及ばざる處であり到底各分を知り分に安んずるの境地を打開するに非ずんば平和は得難きことである云々(七月十日滿洲新報轉載)

江見氏來信 小生渡滿以來滿一ヶ年有半中心中

かに面白からぬ情に充ち營口に參り新天地を開き佛祖御高恩の萬分の一に擬し奉り日蓮主義の宣揚に努力奮在候、十二日午後八時より居留民團樓上に於いて日蓮主義大講演會開催、開會之辭小寺洋行川島重治、享樂主義の囂、滿洲新報主筆小川義和、日蓮主義と國民思想調察江見、聽衆堂に滿ち多大の感動を興へたり、爾來警察隊軍人會等の講演も依囑され候、當地野蠻俳優の句に

七月統一國報

○七月六日 小雨、午前子供大會、開會若林不比等君君が代、宗歌、調話、野澤少將閣下、童話、妹尾義郎君、餘興、奇術奇天齋、法國歌、自警文、菓子頑興、來會者三百名にて盛會、本會に寄附芳名如左

- 金貳圓五拾錢 諏訪 景是君
金貳圓五拾錢 無名氏
金貳圓五拾錢 元木 正治君
金貳圓五拾錢 黒須源太郎君
金貳圓五拾錢 安川 末子君
金貳圓五拾錢 井上 準吾君
金貳圓五拾錢 平木 楊三君
金貳圓五拾錢 塚本 フミ君
金貳圓五拾錢 中澤平五郎君
金貳圓五拾錢 塚本 マツ君
金貳圓五拾錢 深澤 しづ君
金貳圓五拾錢 坂井徳之丞君
金貳圓五拾錢 証本 豊治君
金貳圓五拾錢 牛紙堂東畫用紙五百枚
金貳圓五拾錢 久富 久子君

釣居は蟬鳴飛過、藤の上 高岡 古谷 雲峰
蟬鳴や法衣の袖に成を撮ふ 池谷 立川 金峯
蟬鳴や砲車過ぎ行砂埃 麻布 大塚 曉花
▲評 龍車ならぬ砲車乎蟬鳴の男も及ばず阿々。
砂埃を立てつゝ郊外行車の様見らる。
蟬鳴や表の深き藪の道 大坂 山中 慶山
かまきりや手洗水の杓の上 阪上 長尾 直水
かまきりや腹の冷たき雨の跡 市村 西澤 明光
電燈の螢をとり落つ 白山 かね 女
蟬鳴の蟬をおさへし銀杏散 黒田 鐵蕉
透げやうぞ蟬振り反る蟬鳴散 三河島 西澤 明光
蟬鳴の物にすねる風ある日 城東 堀江 雅溪
破れ燈籠の油流る蟬鳴散
▲評 紙めても紙めなくとも斯る意匠は奇抜にして何となく感興を惹く
蟬鳴の蟬の眼光りけり 長門 萩 村
物音に蟬鳴ヂツと立直る 浅草 山根 青村
蟬鳴の姿勢を正す可笑きよ 同 同 同
蟬鳴のあと振返りし 日本橋 窪田 鐵橋
蟬鳴や石切鋸の上すべり 同 同 同
蟬鳴や障子の影の恐ろしき 同 同 同
▲評 實物に於て滑稽を感じ數倍大の影に於て恐ろしきを見る
悠然と蟬鳴歩草の園 萩 村
蟬鳴や美人の袖に抱みつく 同 同 同
▲庭下駄にふんぞり反る蟬鳴散 同 同 同
『鬼 燈』
鎮座して瀬戸の鬼灯熱しけり 晚 江
歌讀の姉が鬼灯をならしつゝ 雲 峯
鬼灯やあやふく懸るハンモック 伊 谷
鳴らし得ぬ子や鬼灯を試みる 伊 谷
◎鬼灯や假名書長き年走り 金 峰
▲御交際の爲に短冊一葉を呈す(王山堂)

校庭の鬼灯うれて休み哉 直 水
鬼灯に着物を着せて休み哉 高 岡
鬼灯のうれて泉色染くる子哉 池 谷
鬼灯やあやふく懸るハンモック 大 塚
鬼灯を鳴らす口つきに金魚似たり 一 峯
鬼灯や罪なき怒の愛らしき 萩 村
鬼灯に泣いた姉さきの子守哉 明 琴
鬼灯を茶碗に入れて寝る子哉 青 村
横濱で鬼灯ならす外委哉 同 同 同
倅に足ぶら下げて鬼灯吹く子哉 同 同 同
鬼灯吹きつゝ隠して見れば地にまく 同 同 同
鬼灯鳴らす露の見ゆる赤手綱 同 同 同
鬼灯や嫁ぎし妹が植え置し 同 同 同
氣まくれに鬼灯ならす未亡人 同 同 同
ほゝつきや鶴り多き人の口 同 同 同
鬼灯や小猿の手には無慘なる 同 同 同
鬼灯や歴く癖びし忍垢子 同 同 同
子を持たぬ鬼灯の家や老夫婦 同 同 同
子等のぞく鬼灯赤し垣の中 同 同 同
鬼灯を鳴らす遊女の齒の白き 同 同 同
▲酸漿の着物脱かして並べけり 同 同 同
○次號課題 『無花果』『栗』
月次句集 上總中島本
永寺にて
○第二回 『雜題』
○天位
月は柳にかくれけり子規 春 淨
○地位
香菊の中から明けて蕪華散 貴 山
○入位
三日月の下からも啼く水鳥散 一 山
▲評 『も』の一字に於て他にても鳴ける水鳥を知

金堂開也 午後 時より日曜講演 聽衆五百名
 日蓮主義信仰意識 長谷川義一君
 日蓮主義の現狀 野口 日主師
 日蓮主義者當面の活動 本多 日主師
 八日 晴、本所區向島小松町川島松雄氏宅に於て夜講發會
 小日蓮 妹尾 義郎君
 精神修養の必要 井村 日成師
 神田區今小路信道會夜講發會 若林不比尋君
 日蓮主義信仰 關田 日成師
 勝利の人生 關田 日成師
 九日 夜、神田區猿樂町九野澤少將宅に於て信仰座談會
 基督教義中の神に就いて討論 聽衆二百餘名
 十二日 土曜日 青年會法華經及立正安國論講義 野澤 少將
 十三日 晴、午前子供會、午後七時より日曜講演 川島 松雄君
 廣みの備み 妹尾 義郎君
 廣宜流布の時 野澤 少將
 聽衆二百餘名
 十五日 晴、日本橋區川瀨石町久保田雅己宅夜講發會、聽衆四十名 小林 一郎先生
 十六日 野澤閣下宅座談會例會 聽衆二十餘名
 論題 我皇靈觀 長谷川義一君
 十七日 晴、神田三崎町河津中澤平五郎氏宅夜講發會 二陣三陣ついで 野澤 少將
 日蓮主義信仰 野澤 少將
 十八日 晴、盛壽寺施餓鬼大法要を営む 淺草區淺草町労働館附屬少年樂園に於て行道會主催 無縁病者遺善大法要を行ひ終つて松尾鼓城先生、井村日成師の講話あり其他餘興數節 聽衆約二百名
 二十日 晴、日曜講演 松尾鼓城先生
 成佛とは何ぞや 小林 一郎先生
 國難に處するの道

二十三日 晴、本郷正道會例會 聽衆五十名
 四面觀の道徳 松尾鼓城先生
 信仰と軍制の對比 野澤 少將
 二十四日 烈暑、午後二時より閣上に於て地明會(婦人會)を開き本多親下の御講話を聴く出席者増加して盛況
 婦人諸姉の奮つて御講來を祈る
 二十四日 夜、小石川野澤閣下後藤秀次郎氏宅にて小石川支部例會 無常と日蓮主義 妹尾 義郎君
 日蓮主義法政道 野口 日主師
 二十六日 夜、本所松坂町小松崎一郎氏宅例會 聽衆六十餘名 小松崎一郎君
 法華經信解談 井村 日成師
 何を信すべきや 井村 日成師
 二十七日 晴、日曜講演 聽衆三十餘名
 悦びと悲み 長谷川義一君
 本門の本尊 井村 日成師
 二十七日 統一閣幹事田村佐太郎氏の幹事により上野國書郡中五條町に於て同町青年會主催、日蓮主義講演會を開く
 聖日蓮 妹尾 義郎君
 信仰の道程 本田仙太郎君
 我國體と日蓮主義 野澤 少將
 統一閣へ寄附芳名
 金五圓也 妹尾 義郎君
 金五圓也 竹内孝次郎君
 金五圓也 石井清一郎君
 金拾圓也 川井 淳平君
 金拾圓也 無名氏
 金拾圓也 同 上
 金貳圓也 同 上
 金貳圓也 同 上
 金貳圓也 無名氏
 金貳圓也 日比野妙鏡女
 金貳圓也 横井 民雄君

○秀逸 (天下順序不同)
 冷豈直謀男の手酌かな
 夏旅の休みよして月夜後
 夕立のあと朗かや鶴の聲
 化粧した女の曇りさ
 夕榮や若葉もれ来る鐘の音
 出陣の様に揃ふた浴衣哉
 紋の聲の軒に悲しき雨夜かな
 腰のせはまた日は高し田舎取
 夕顔にかうまる風呂の煙哉
 夕立にこほれこみけり露句の
 渡し場をとも越しけり雨の端
 一崩れしてから揃ふ踊り哉
 ○軸
 舞散りて風に水行く蓮の舟
 病む人の細戸重たし子規
 月落ちて水鷄止みけり川しらむ
 同 同 王
 同 同 山
 無名氏
 津川 明信君

●本郷正道會 七月二十三日夜本郷二丁目加藤寅五郎君宅にて講演、野澤少將、松尾鼓城氏出演さる。
 ●布教片信 秋葉氏は十一日より東京に久方振りの恩師關田日成師の許に折柄の盞盞盆の事とて、十八日野澤閣下にて施餓鬼布教を試み、秋葉氏は外來思想と日本の道徳を論じ小西文學士は信仰の極致を評論せられたり、十九日は法成寺施餓鬼布教にて秋葉氏は戦争後の思想問題に就て關田日成師は同向功徳に就て詳説せられたり。
 ●統一閣本所支部 六月五日、神ノ郷五町、武田天民宅にて講演、川島松雄、妹尾義郎、野澤少將、

井村日成の諸氏出演、聽衆五六百名。▲同廿日、松坂町小松崎市郎宅にて、妹尾義郎、井村日成、小松崎市郎、聽衆四十名。▲廿五日、法恩寺橋際にて道路布教。小林智道師は統合大學生數名と共に布教さる、聽衆二百五十名。▲七月八日、向島小松崎町、川島松雄宅。加藤重太郎の外に「小日蓮」を妹尾義郎、精神修養の必要を井村日成師述べらる、聽衆二百二十名なりき。▲廿六日、松坂町小松崎市郎宅にて、小松崎市郎、川島松雄、井村日成の三氏出演聽衆四十名なりき。

●京都活動教報 本山妙滿寺に於て、萩原部長湯案の納涼講演開催の件は山内寺院住職及護正會幹部全會一致を以て協賛即決し、七月廿五日より一週間境内講堂前に於て開講、思想問題を解決すべく各都大東輪の奮闘をなせり、此思想戦に奮闘の士は富永、山田、大橋、木田、別所、北澤等の護正會幹部及今井乾昇、萩原啓二、栗田孝真、大川孝準、加藤成信、藤野純、有田安道、銀井乾昇、萩原本山部長等にして、講題は日本及世界的に目下重要緊切なる諸問題を掲げて、明晰なる智識を傾け、大に熱辯を揮へり、されば毎夜涼臺は滿員の盛況を呈し多大の反響ありたり。尙願本健兒會見章に對し、六時より七時半まで、栗田孝真、加藤成信、萩原啓二、北澤安兵衛、三好信道、有田安道、萩原部長等得意の歴史物語並にお伽噺等ありて健兒の脱兎樂に輝けり、戰士金先孝頭領は去月已來病氣の爲、参加する能はざりしは、同志一同の最も遺憾とせし所なりき

演を爲し、又熱心なる有志者によりて常規統一閣を組織するにたり、自今大に日蓮主義の宣傳に努力すと規約左に
 第一條 本團は常規統一閣と稱す
 第二條 本團は利根沼岸(下巻、茨城)の有志者を以て組織す
 第三條 本團は毎日建立正安國の大義に基き國民思想の統一演説を期す
 第四條 本團は時々各地に講演を開催す
 第五條 本團員たらんとするものは申出すべし
 第六條 本團經費は特志者の寄附に依る
 第七條 本團事務所は茨城縣鹿島郡若松村太田長照寺内に置く
 第八條 本團定期は東京統一閣支部別に準ず
 大正八年七月 已上
 ◎賛成者 (列名不順)
 ◎太田、太田眞、村長加藤謙造、石神丹藏、◎野野野口藏、
 ◎佐原町、院長松浦忍、清水龜太郎、鏡形清七、
 ◎小見川町、町長石毛巳之助、成毛力之助、星野聖祐、◎森山、村長中島源之助、郡會議員橋野寅次郎
 ◎府馬、給馬伊之吉、平野仙太郎、村長森剛、赤坂健、平山三藏 其後

●學生實習布教

統合宗學林の大學生より成る實習布教團は權留正木村日成師を指導と仰ぎ、古谷幹夫、吉塚通暎、小林智道、土屋信玄の四師は七月二十日東京を發し、左の順序にて講演を終りたり。
 二十二日 京都妙滿寺(聽衆二百名)
 二十三日 大阪蓮成寺(同百名)
 二十四日 同堂開寺(同六十名)
 二十五日 堺妙滿寺(同百名)
 二十六日 神戶カフエオリアメント(同二百餘名)
 二十七日 姫路明治幼稚園(同七十名)
 二十八日 和氣木成寺(同百數十名)
 二十九日 岡山本行寺(同三百餘名)
 三十日 明石中崎遊園地(同三百名)

●京都例會 △一日國語會、三好師、△八日畫成就院に於て護正婦人會、有田安道師の講話、△同畫大慈院に於て法王婦人會、銀井師の講話、△同夜は久遠寺に於て常正修養會、三好、有田、萩原部長出演、△九日畫正行婦人會、萩原日蓮師の講話、△十日日本正寺婦人會、三好師講話、△十三日本山宗祖會萩原部長講演、△十八日日光寺婦人會、萩原日蓮師講話、△同夜本山例會、前講三好師次に、勞働問題と佛敎、萩原本山部長。
 ●大阪堂閣寺教報 七月十二日平和成立祝賀講演、世界の平和と三大自覺を京師演説、正義の絕對權威を上田有教師、廿四日學生布教(別に掲出)
 ●茨城教報(常規統一閣) 六月二十六日特命布教師成島日衛師は今同管長の命に依り茨城縣鹿島郡若松村太田長照寺に駐在布教に従事するにたり、二十七日は同寺に於て講演(木村令快、成島日衛師)次て翌日十八日より、廣瀨、石神丹藏氏宅に始め各所に講

●久留米教報 久留米に於ける七月中の傳道如左
 一 井上房太郎宅にて中原通應師の家庭講話。本泰寺に正信會第三十八回例會を開く。同日夜久留米天晴開會之辭
 天晴會幹部 小泉 顯應

四恩師に就て

三浦源次郎 中原法學士 門外漢の口實主義論 中原布教師 日蓮主義の綱格(其一) 七日吉岡松次郎宅にて法話會。出海後、中原師...

福井市通信

五月二十七日は縣内宗門聯合にて妙經寺に大講演會を開く石井寛俊師開會を宣し亞て出...

妙經寺檀の奮發

福井市妙經寺にては石井寛俊師入寺以來教化に盡力し、寺門の經營に盡し大に檀...

第參區青年布教團

七月九日、茂原道路布教團を開催す、辯士は栗原布教師、竹内顯、山田誠心、...

新盆と供養

妙善寺小竹師は毎年新盆精進の施主より供養法會の際金品の寄附を仰ぎ居れるが、本年...

市橋龜藏氏の逝去

山陰の豪家にして宗門外護の大檀那たる教學財團理事長市橋龜藏氏は、昨年十一月微恙を感じ以來漸次尤...

本永寺講演

千葉縣津郡金田村中島本永寺にては從來講演絶へたりしが、福井縣より新任せられたる秋葉純一師は布教に熱心にして赴任已來毎月...

美作津山教信

二と七の日弘通所命詣日能仁一十師の講話あり。▲六日晝、公會堂にて衛生講話あり...

三重縣通信

七月九日は四日市種の町布教團に於て團員講話は祖先靈位の法要を營み、一同乘船して...

四日市二信

七月廿一日夜、同市新丁港座にて大講演會を開く、來聴者約二千名、清水一乘即開會の...

北郡金澤教況

七月廿二日金澤市給飯町本長寺に於て窪田純榮氏の信仰と實生活。▲廿四日同寺に於て天晴會議演會水央氏小島清信士の博識論。▲廿八...

敬徳

南無大門毒量之大本尊別シテハ本佛別付未法弘通之大導師宗祖日蓮大聖人等哀慈納受アラセ給ヘ...

三百題忌常樂院日經上人全集

身置法華の法將格百雜護の教養常樂院日經上人の第三百題忌に當りて不肖因縁ありて上人埋骨の地たる金...

平和祝報恩會

千葉縣第七教區寺院は戰時講話數十回を開催せしが、平和後七月十二日御門妙善寺にて晝、平和祝報恩會に戰死病歿者諸靈追弔法會...

加賀金澤市本覺寺住職

窪田純榮 大正八年八月 加賀金澤市本覺寺住職 窪田純榮 願 願

一方便、一自我傷、一假鉢、一開棺、有田師、一茶湯、桔梗師、一寶具、窪田師、一教徳、富田住職、一財團事務、金光師、一御遺文捧讀、萩原部長、大

導師管長親下、一一般弔弔弔弔、一自我傷、一燒香、一題目、以上

力ナ大ナラシメタル者歟。宗祖ノ曰ク人身は受け難し爪の上の土、人身は持ち難し草の上の露、百二十まで持ちて名を下して死せんよりは生きて一日なりとも名を擧げん事こそ大切なれ、中務三郎左衛門の尉は主の御爲にも佛法の御爲にも世間の心根も吉かりけり吉かりけりと鎌倉中の人々の口にうたはれ給へト云云今居士が生前ノ事跡ヲ擧グルニ當リ、宗祖ノ訓誡ト思ヒ合セテ轉々敬テ言フニ至ニ堪ヘズ...

弔詞

世ノ諸佛ハ此經ヲ師トシテ正覺ヲ成シ十方ノ佛陀ハ一乘ヲ眼目トシテ衆生ヲ引導シ...

夫レ法華經ト申ハ八萬法藏ノ肝心十二部經ノ骨髓也三

靈鏡院 日 通教日

世ノ諸佛ハ此經ヲ師トシテ正覺ヲ成シ十方ノ佛陀ハ一乘ヲ眼目トシテ衆生ヲ引導シ...

本多師と名古屋市

常徳寺の講演 七月十九日常徳寺に於て本多

愛知時計社講演 二十日午前九時同社職工全

四日市二報 別項記載の如く廿一日添座の本

本誌松尾主任の講演 七月は横濱内田造船

千葉縣通信 七月十一日上野山之江中野齋青

力産會起る 日蓮主義員會の中堅二十餘名は去る八月二日松尾

力産會々則 第一章 名稱 第一條 本會ハ力産會ト稱ス

力産會々則 第二章 綱領 第二條 本會ハ左ノ綱領ヲ有ス

店員入用

店員十三歳より四五六歳迄の者五六名入

三法堂 藤田總治

日宗法衣專門 袴服靴帛帽雲青

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北 振替口座大阪八四七

定價表ハ御申送次第



讀者ノ意見ヲ徵ス 六、本會ハ無益ノ贅澤ヲ慎ム 七、本會ハ本會ノ精神ヲ誘導シ補助スル人ヲ喜

本誌松尾主任の講演 七月は横濱内田造船

店員十三歳より四五六歳迄の者五六名入

三法堂 藤田總治

日宗法衣專門 袴服靴帛帽雲青

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北 振替口座大阪八四七

定價表ハ御申送次第





(號五十九百二第)

無始無終の國體
聖德太子の憲法
日蓮聖人教義綱要
愛國と世界

本誌主任 大僧正 正
松尾城 鼓生 日成 治
井村日 榮
永橋 治

和歌「閑庭草花」
機微譚語 九二 苦樂超越
大聖日蓮
本多本團總裁の雄飛

清岡長言選
山根青村
松浦祥海
中原通應報

統一團支部設立に就て

統一團支部設立の事を發表致しましたら、千葉町を初頭として大阪其他より續々と申込みがありました。今尙一層募集の手を擴げつゝありますから其の發表期は少しおくれることゝなります。我々は本多本團總裁を中心として全國に大輪廓を描き、手を繋ぎ足拍子を揃へつゝ總裁の所謂『國民教化』の大運動を起さなければなりません。志あるの士は此際この設立に對して大に協賛の聲を寄せていたゞきたいのです。(前號本欄の廣告を御參考下さい)

統一團支部設立に就て

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年九月十五日發行(毎月一週十五日發行)

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

所輯編一統町前山白川石小京東 所扱取務事行發

▶ 番三三五三三京東座口替振 ◀

念珠ならば小野嘉助店へ
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達
御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし從來
調進仕り候へば多少に不拘御用
命願上候

京都市寺町通蛸薬師下ル
念珠 小野嘉助
電話 中二六〇八番
振替口座大坂一九七二〇番

●布眼薬 田血の薬(廣告)
諸君各位愈々御隆昌奉賀候陳者多年御眷顧を蒙り居り候布田眼薬及び布田血の薬は世界戦亂の影響を受け平和和克復と相成り一層原料薬品を始め附屬品製造費共甚騰甚しく到底満定價を維持すること能はざる場合に立ち至り候に付誠に乍遺憾七月三十一日限り左記の通り薬價改正仕り候最も自今一層原料の精選に努め専ら品質本位を以て發賣候間何卒弊舖の苦衷幸に御諒察の上倍舊の御取引被下度候也
追て右日限内と雖も既製薬賣盡し次第新定價薬發賣仕り候間是亦不惑御承引願上候也
眼薬定價一瓶拾五錢、三拾錢、五拾錢、七拾五錢、壹圓五拾錢
田血定價二包入拾五錢、十五包入壹圓
大正八年七月十五日
千葉縣山武郡源村上布田藥王寺
千葉縣山武郡源村上布田藥王寺

●佛具調度所
御も佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候
位牌木鈺 調度所
宮殿幢天蓋一式
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山 總本山妙滿寺 大本山本國寺 日宗各教團
京都寺町四條南大雲院前
舊名「乾清」事 辻井岩次郎
大佛師 振替大坂八一五七番
多少に限り御 電話下三二五八番
用奉願上候也 ●御用仰せ被下候は、町呼深切を旨と致候●

日蓮各宗 寺院 御僧
法衣 草木 一直に御聯想下
京都 三條通烏丸東入ル町
草木本店
電話 中七三五番
振替口座東京二一五五九番
東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話 下谷三四三番
振替口座東京二四五六八番

●佛壇佛具一切卸小賣
迄歳六五四リヨ歳三十員店
候慶下彼話世御名六五者之
卸部 三法堂 藤田總治
京都市三條通小橋西入中島町
各宗御本山御用達 長距離電話中二七八三番
大畫佛表具師 振替口座東京二〇七九
佛師 同町 振替口座大坂四二五九
小賣部 三法堂 佛具陳列場



謹啓 過般御地監督布教の際には種々御配慮に預り爲法奉感謝候 豫定の巡教を結了致し去る十五日無事歸山仕候 申す迄も無之寺檀和合内に信念を増進し外に正法を發揚し以て各自の本分を全ふせられんことを爲法爲國祈上候
先は以略書禮辭申述候敬具
大正八年七月廿一日
岡山市山崎町本行寺駐在
監督布教師 能仁 事一

(行印會秀三 地雷一目丁二町代士美區田神市京東)